かまがさきのつづりかた

吉谷四郎

あめのちかどう
ずぶぬれの　きすぐれのルンペンが
ねながらはいた　かばいろのちへど
バクダンという　ごくらくのはなびだ

につぽんの　ことう　えのかれいなる
ジユウタンだ
たにんはみるな

ふるしんぶんを……そつと
かばいろのはなもようにきせた

つうてんかくの　ちようかくの
ネオンとけいがぜろてんで
あめにひかつている
ぜろはにんげんのはじまりだ
おれはことうのひとのはだかの
まごころをしんじよう
ぜろからいきるぞ……

本名　吉谷四郎　五十二才　日雇
奈良県出身　旧制中学中退
十八才の頃単身で朝鮮に渡り放浪生活に入る。以来今日までの間に、銀行員、外交員、店員、バーテン、喫茶店経営、ボイラーマン土工、塗装工、バタヤ、雑役夫等あらゆることをして来たとのことである。
一時はどさ廻りの劇団に加わり、三味線をひいたこともあるという。
三年前に裸の会に入会してから、詩を作るようになつたというが、社会の底辺を詩いつづける彼の詩には、庶民の温い人間感情が一貫して流れている。正しく放浪の詩人といつたところです。
彼が自ら求めて放浪生活を続けたというのも、彼が摑め得なかつた詩神を求めての放浪ではなかつたのか？と思います。
大阪での日雇十五年選手である。昨年十月頃胸を患い、現在入院療養中である。
（松原記）

花

矢魔奈愚呆

こんまいちんこの童ごろ
ままごと遊ぼのおかあさんは
たんぽぽすみれにげんげ草
ふるさといにとてかか（母）慕げ

おんぼこ娘の春の花
恋のせつなさ知ったげに
四ツ葉のクローバさくらんぼ
おいらの好きんと（人）どぎゃあーした

つろうて悲しゅうていかなが日
涙ポロポロ淋しか夜
花飾りんしゃい　花見んしゃい
花は夢じゃけ愛じゃけな

本名　山名敏幸　五十一才　広島県出身　入院加療中（日雇）
横浜の浅野中学校四年生のとき、校規をおかして退学処分、日大附属中学に転校した五日目に、学友を本牧のチャブ屋に案内して遊んでいたところを、臨検の巡査に発見されてまた退校というのだから念がいつている。
昭和七年に北支に渡り、終戦まで北京、天津、青島と貿易業をやっていた。社交ダンスとカクテル造りは戦前の本格派らしいが、終戦後はどうもやることなすことはずれっぱなしで、というのは大陸と終戦直後の日本との差が大きかったのだろうが、とにかくつまずいたり転んだりの連続で、這いながらやってきたのが釜ケ崎。
日雇を十年やったが、三年前から胸を病んで天王寺病院にはいっている。会の発足後間もなく入会した古い会員で、ユーモラスな作品を書き綴けてきた人である。
（田結記）

釜ケ崎

定やん

釜ケ崎銀座は、俗にいうカスバの都、釜ケ崎のどまん中にあり、夜通し人通りが絶えない。夜でも新聞が読めるほど明かるい。

午前三時、酒あり、女あり、風呂あり、食堂が開いており、タバコでも買える。

どう！

悪いこともあるが、良いことも沢さんある。

それが証拠に指名手配をされたものや、家出人もチョクチョクお見えになるしだいである。

月末のアブレの友にねだられて
あり金貸してわれ水を飲む

本名　浜田定男　二十八才　工務店現場監督　高知市出身
中学校を卒業後間もなく来阪、以来ホッピング工　旋盤工　テキヤ　写真見習　夜泣きそば売子　土工　鳶職　食堂手伝等の職歴を経て今日に至る。一時ヤクザ仲間に加わったこともあったが、裸の会に入会したことを機会に足を洗い、今では細君と二人で健全な生活を営んでいる。

井上青竜氏に師事して写真技術を修得、裸の会のカメラマンとして、その技術は高く評価されている。竹を割ったような性格の持主であるだけに、曲ったことが嫌いで、困った人達の面倒をよく見る。

釜ケ崎に住みついてから十年になるが、この街では〝定やん〟で通っている。三十七年七月朝日ラジオ放送は〝関西の顔・釜ケ崎の定やん〟として彼を取り上げ、放送したことがある。彼の写真技術は高く評価されているだけに、このまま眠らせておくのは惜しいものである。

この人も裸の会発足当時に入会した最古参会員の一人である。

（松原記）

川柳

武　侠骨

人生の疲れ踵へのせ切れず

去りゆく五月の詩雨は屍のごとく濁った水

ろの音！唄に芦かりの間をぬい

気がつけば夕涼みの街をさまよえるかな

ともすれば愚痴のこぼれる新日本

本名　武　定雄　岡山県出身　五十八才　店員

郵便配達をやったり雑役夫として働らいている間に、北支に従軍したり南方に徴用を受けたりした。

昭和五年頃（二十三才）友人の勧めで川柳を習い始める。

釜ケ崎に移り住んだのは七年前。その初めの頃、この人とは確かどこかで何回か顔を合わせているはずだが、どこでどういう関係でだったか記憶がない。太い眉と、人に譲らぬシンの通った一徹な善良さだけが印象にある。

岡吞狂氏に師事し、現在「東京柳樽寺川柳会」の同人。その同人誌「川柳人」に寄稿したものにはなかなか秀句が見えるが、裸誌に投稿のものには玉石混淆の感がある。多作のせいであろうか。この人の作品を見ていると、大へん失礼かも知れないが、笠置シズ子のジャズを思いだすこと妙である。

「俳句と川柳、うたと詩と、それがナンヤラごっちやになりまして、わて、ホンマニようういわんわ」である。

（広野記）

梅の花のこども

きど・よしみ

かっちりとひきしまった
果実のように
小さな顔で
いつもだまって笑う
不思議なくらい泣かない
そんな赤んぼうだった

貧困のどん底で生まれ
育ったのに
籔かげの梅の花のように
黙って笑っている
そんな娘だった

ふるさとの小さな墓のそばに

ひとりばえの梅の木を
私は静かに植えた
もう花をつけはじめただろう

本名　木戸佳幸　四十二歳　熊本県出身　軽印刷下請職人

中学時代落第ばっかりするので、学校をやめて軍隊に志願したため、四年間を戦争で過ごしたという。戦後旧制高校に学んだが「全学連」にうつつをぬかし、そのため三年たっても一年生であったという。

学校をやめて会社に入ったが、レッド・パージで職場を追われ、小魚売り、あさり売り、牛乳配達、ギャンブルの予想屋、ダフ屋と、生きていくために、やれるものはなんでもやったという。

そのような生活の中にあったある日、ふとした事故で妻子を失い、乞食のような心で暮らすようになった頃、釜ケ崎に住みつくようになり、その頃から詩を書き始めたという釜ケ崎の五年選手である。

裸の会発足後間もなく入会、裸誌には毎号詩を発表して来たが、その後党活動をするようになったため、一時裸の会から遠ざかっていたが、昨年党活動をやめ、再び裸の会に復帰した人である。

骨のある詩を書く人であるだけに、会への復帰を嬉しく思っている。釜ケ崎の狭い日払いアパートの一室に独りで住んでいるが、彼もまた厳しく自分を見つめながら、釜ケ崎を愛し、釜ケ崎を詩い続ける詩人のひとりである。

（松原記）

三番船艙

平岡敏明

三番船艙　夜の石炭荷役
それは恰も地獄絵図だ
エンジンルームの隣だけに
エンジンの熱が石炭に伝わり
灼熱の太陽が外板を焼いている
隙間のない船艙の中から
作業の汗が天をこがす
　―交替時間
待ちこがれていたように
立て梯子から登って来る労務者の群
　―石炭なら黒

褌一ツの男達
石炭と汗でもみくちゃになつていても
その疲労の底から
解放された喜びの色が見える
根性で支配する　デツキマン!!
根性で作業する　裸の男達!!
むし暑い船艙
高さ十五メートルの船底に　空のモツコが
おけらになつた男達を待つている
　―石炭なら黒

　―鉱石なら赤
材料によつて皮フの色が異つていく
船艙の出入口に　その色のためか
ゆがんだ顔が交叉する
男の仕事　それは本船のタラツプから始まり
タラップで終る
労働の報しゅう全部がアルコールにかわっても
誰もお前を責めはしない
俺は知つている　三番船艙の苦しみを……
鉄板の暑さや　崩れた材料の山の谷間に上る
湯気の怒りを……
かわき切つた唇や　作業が終つても
通船の来ない辛さを……
朝の太陽が　波に反射して　まぶしい

裸創立発起人の一人。
日雇の足を洗い、会社に就職して二年に近い。
酒は飲まない。
地味だが、着実に一歩一歩を進めていく堅実型。
詩作態度も多作型だが、まじめな作品が多い。
会の世話は何かにつけ、随分、やつてくれているが、目立たない。今後もお願いします。
ペンネームなし。三十七歳　（広野記）

反省

川佐　勲

かたつむり
そろそろ登れ　富士の山
よき時代の人はいいました
私は富士に登りに来た人間ではないのです
二歩進んでは一歩退き
三歩進んでは二歩退き
残った一歩一歩が
まだまだ続く人生です
かたつむりと同じようですが
反省をするからです
これを身につけてしまうと不思議に

神さまも仏さまも私達には
必要なさそうです
反省があるからです
裸は風呂に入る時だけではなく
人間をかえてしまいます
平和な時にこそ反省してみませんか

本名　川佐　勲　三十六歳　神奈川県出身　会社員

二十一歳の時今東光の兄弟子の門下生として入門したが、宗門派閥の烈しさに疑問を抱いてとび出し、リックサックを背負って、北海道から九州の果てまで無銭旅行をしたことがあるという。

二十五歳の時「栃木県宗教連盟理事」になったが、ここでも「二千万円の財産を取るか？　それとも女を取るか？」といわれたことから、「どちらも必要なし」といってとび出し、再び放浪生活を始める。

その後何回も結婚に失敗したが、埼玉県の牧場で結ばれた現在の細君とふたりで釜ケ崎にやって来たのは七年前のこと、以来土工などをして仂らきはしたものの、酒とバクチに明け暮れて細君を泣かせたことがあったが、裸の会に入会してからはバクチをやめ、節酒し努力したかいあって、現在では社長に見込まれて会社員となり、二児を抱いた睦ましい家庭を築いている。

彼こそ誰にも頼らず、自分の腕一本で立ち上った努力の人といえる。「釜ケ崎を出なければ立ち直れない」とよく人々はいうが、彼はこの言葉を否定し、釜ケ崎に居ても、立ち直ることが出来るということを立証した人である。裸の会に入会後二年たった今日、ようやく詩を書き始めたが、彼もまた詩人のひとりであったのかと思うと、彼の放浪生活が、何を求めての放浪であったかがわかるような気がするのである。

（松原記）

大和雑詠

平野呂宋

東塔の影をうつして古石の水だまりあり元興寺趾

時々に野鳥の声す大和路の軒の甍に知らぬ草はゆ

春さめにうねびの山の遠かすむ紀元の節をきよ
ことほぎて

みよしのの山に咲きける桜花いつの世までもぐり
かえしさく

松高く東大門に秋陽さし二三の鹿に外人のよる

本名　平野文三　六十五才　堺市出身　会社員
堺に四百年前からある魚問屋〝鍋屋〟の次男である、高小卒。
長谷川小信氏から浮世絵、直堂氏から丸山派の絵を習った。
工員、守衛、古道具商、パン屋、料理屋等に勤務、三年前に釜ケ崎に来て日雇。
サンドイッチマンをやっていたが最近ガラス会社に入社した。
昭和四十一年五月、堺市上神谷図書館から堺史話を発行、近く第二巻を出す。
裸の会には三年前に入会。短歌、俳句、随筆を書いている。会合には良く出席し
勉強している。真面目で熱心な会員の一人だといえよう。　（田結記）

アンケートに応えて

すが　みちきよ

いつか来た道を再び歩く
私の背に　眞夏の夕陽の何と重いことよ
人の山波にも　活火山が犇いて
しばしば　時ならぬ噴火を起こそうとは
この火山への道を還ってはいけない
この火口に蹲ることは避けたい
火山からこの町への道を見出すのを
いつしか当然とする心が
訝しげに拒否する微粒子を遠ざける
火山灰をかぶらぬように
熔岩に身をやかないように
眞夏の夕陽に跪いて踵を返す

凛とした仔馬の嘶きを遠望する故に
この町への執着は　誤ちだろうか
ここで生きるのは　無理だろうか
それでもこの方程式の疑問は
あくまで　自からの力で解かねばならない
ぶざまな虚根に衝撃を打けようとも
マイナスの滑稽にたえねばならない

本名　池崎　巌　40歳　本籍　長崎県　会社員

まことにおとなしい人である。会合に出席してきて先着者がいると、ていねいに頭を下げて席につく。いつもまじめな態度である。口数は少ないが、それでいて疑問があれば質すことを臆しない。内に秘めた情熱はなかなかのものがあるように見受ける。

松原会長は「まじめな人ですよ」と評する。おとなしさが、つけ焼刃でないということだ。

西成にきて日雇をしていた時期は約一年半あるが、もともと育ちのいい人だから、いまでは大きな運輸会社の正社員となっている。

中国山東省の青島で生れ、国学院大学高等師範部を応召のため中退した人。小学校助教諭、米駐留軍の書記、文具店店員などの経歴がある。

入会して半年余りしかならないので、まだ深くつきあう機会を持たないが、よき仲間とつきあって会に欠かせぬ人になって欲しいと思うや切。（広野記）

思考

四季　啄水

泣きつかれたあとにふくよかと香る
人生の味を
笑いつかれたあとに人生の大きい流れを
ぼくは拾うのです
遠い思い出の鼓笛を再現するかのように
その向うにはなにがあるのでしょう
仕合わせってなんだろうかと
未知の世界に許された希望と理想を
汗の中でしわくちゃにもみながら
そっと撫でてみるのです
きっと磨かれた丸い

真心の玉ではなかろうかと　ぼくは
所詮という環境の中から
そっと這いだしながら……
空は広い　海も広い
ぼくの考えはなぜ狭いのだろうかと
人生の回転椅子にすわって見るのです

本名　越智盛逸　49歳　愛媛県出身　工員　香川県多度津中学卒業
彼は、裸の会の事務所を再三訪れた。それは彼が嫁を欲っしていたときで、いわば春気発動期といえる。あれから五年、まだ女房ももらっていないようだが、だれか立候補してあげてくれないか？
学校を出てから綿業、こいつがいろいろとおもろいが、型通りに調理士を経て材木屋さん、硬いのと柔らかいのを交替でやったとこが満点か、釜ケ崎では七年間アンコをやり、まだ芽が出そうもないという。誰か芽を出してやってくれないか。
小学生のころから詩歌が好きで、いろいろ書いていることはご承知の通り、大平洋戦争ではビルマ、タイを転戦した。
ひどく素直だが、リアリスチックな作品を書いている。素直に伸びて欲しいものである　（田結記）